



学問をするということとは、
何かをできるようになるということ

NHK英語講座講師 大西泰斗さん ひろと 大学院時代の先輩からの言葉



「本来は臆病な性格」という。「その自分が発信を続けていられるのも、やはり研究者としての日々があったから」 伊ヶ崎悠撮影

「話したい」に応える英語理論

NHKの語学講座「ラジオ英会話」を4年前から担当する。おかしみのある語り口で、「なぜ日本人は英語が苦手なのか」を、本質から解きほぐす授業が幅広い世代のリスナーの支持を得てきた。「文法とは、ネイティブと同じ見方に立って英語を見ることが。その見方を、楽しみながら学んでほしい」

実は高校時代、一番の苦手科目が英語だった。「他の教科と同じように勉強しても、英語だけはどうしても理解できたと感じられなかった。割り切れない思いが、英語にのめり込むきっかけになった。

大学からは言語学を専攻した。研究内容を仲間と共有しあう日々は充実していた。なかでも大学院時代の1学年上に、尊敬する先輩がいた。「理論の最先端を走る、ある種の天才」。学究肌の人と思っていた彼に、ある時の飲み会で同席した際、こんなことを言われた。「大西君。学問をするということは、つまり何かをできるようになるということなんだよね」

「その先輩の言葉としては意外だったから、印象的でした。それと同時に、『自分は何かができるようになったのか』と考えさせられました」

それから十数年後、大学の教壇に立つなかで、次第に関心は理論研究

から学び手の英語力をどう育んでいくかへと移っていった。そのうちに改めて思い返すようになったのが先輩の言葉だ。「学問によって、ネイティブの言語感覚をどう説明するのかという方法論を得ることができた。それを使って、彼らのシンプルな英語の見方をわかりやすく伝えることも、私ができるようになったこと。研究者と教師という自分のあり方に橋渡しをしてくれたのがあの一言だったのだと思います」

暗記や読解を中心に教えてきた学校教育にとらわれない文法や語順の考え方を、著書などを通じて積極的に発信してきた。その問題意識と「話せるようになりたい」という時代のニーズが合致し、ラジオやテレビの講座にも携わるようになった。

仕事や日常で日本人が英語を使う機会はずっと増えている。それに応えて教える側も進化していく必要があると感じている。「学問から得た『できること』を使って、社会に役立てることも貢献したい」 (佐藤 介)

1961年、埼玉県出身。英オックスフォード大言語学研究所の客員研究員を経て、東洋学園大教授。NHKの「ラジオ英会話」の講師を2018年度から担当している。共著に「億人の英文法」など。

◇昨年10月、幻冬舎から『それわ英語じゃないだらふ』を出版した。学校で習う英語文法の欠点と「話すため」の学び方を提案する内容で、5刷、3万4千部と好調。